

ふれあいの橋の会



と き 2026年6月25日(木) 14:00~15:30

見学先 介護老人保健施設 なんぶ幸朋苑 米子市石井 1238

出席者 【委 員】生田 仁史、鶴亀 寿子、岸本 保子、高柴 サツコ、田子とし子

【なんぶ 幸朋苑】	中村 泰丈	(なんぶエリア総合施設長)
	濱副 隆一	(介護老人保健施設なんぶ幸朋苑 施設長・医師)
	宇田川 瞳	(介護老人保健施設なんぶ幸朋苑 介護課長)
	遠藤 正和	(介護老人保健施設なんぶ幸朋苑 相談員)
	朝原かおり	(介護老人保健施設なんぶ幸朋苑 主任看護師)
【法人本部】	荒井 祐二	(監 事)



NANBU Area Report

荒井監事：本日は、1996年8月に開設した介護老人保健施設なんぶ幸朋苑を見学していただきます。
中村総合施設長は、所用のため後ほど出席します。 はじめに、なんぶ老健の濱副施設長から
医師としての立場から感じていることを話していただきます。

■老人保健施設の制度的背景と役割

濱副施設長：私は、医師として急性期病院を中心に勤務した後、なんぶ幸朋苑に赴任しましたが、丸7年
が経過しました。本日は、老健施設の歴史的背景と制度的位置づけについて話したいと思います。
日本では、1961年 の国民皆保険制度創設後、1970年から1982年頃まで老人医
療費無料化により社会的入院が増加したことが背景にあります。1987年の老人保健法改正
により老健の概念が作られ、2000年の介護保険制度創設時に介護老人保健施設として位置
づけられました。老健は病院と在宅の中間施設として、要介護者の自立支援と在宅復帰を目的
としています。

①



医師が常駐した施設ではありますが、保険医療機関ではないため、保険診療は使えず、入所者の医療費は施設が全額負担することになります。病態が安定した方が対象で、高額な薬剤を使用する場合は経営上の課題となりますが、大学等の協力で3ヶ月処方などの工夫を行っています。医師が常駐していることでのメリットとしては、リハビリスタッフ（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士）、管理栄養士、歯科衛生士、看護師等の**多職種のチームによる包括的な健康管理が可能**であるということです。また、デイケア（通所リハビリ）や訪問リハビリ事業も医師の指示で実施できる点が強みだと思います。

生田委員：老健は、医療行為はできないようですが、体調が悪化した場合は、病院に入院し、良くなれば老健に戻るとのことですか。

濱副施設長：老健には、レントゲンなどの機器はありません。医師としての判断はできますので、病院と連携し、必要な人は速やかに病院に入院していただきます。

高柴委員：老健では、医療保険が使えないという特殊性について、説明を聴いて理解ができました。

生田委員：老健は、自宅に戻ることが基本ですが、デイケアや訪問リハビリがあることで、安心です。

濱副施設長：老健に併設したサービスであり、医師の指示により、リハビリスタッフが在宅支援を実施しています。

■なんぶ老健の施設概要と運営状況

宇田川課長：なんぶ幸朋苑では、6月11日に水防訓練を実施しました。令和元年から継続実施しており、浸水災害時の内水氾濫リスクに備え、1階の特養利用者を2階へ避難させる訓練や隣接のグループホームなるみの利用者の避難も受入れました。訓練の映像については、見学後の時間に紹介します。外国人職員が増加していますが、今年度は安来市にある大阪福祉短期大学のミャンマー人学生5名を介護実習で受入れました。年々、グローバル化が進んでいると感じています。



遠藤相談員：**なんぶ老健は**、多床室（4人部屋）36床と個室44床の合計80床で、男女比率は男性25%・女性75%、平均年齢は男性83.8歳・女性89歳です。平均介護度は3.5と**重度化傾向**にあります。在宅復帰を基本として3ヶ月での退所を支援しています。特徴としては、季節的な利用があります。郡部の方が冬場の積雪時期や夏場の脱水リスク時期に定期的に利用されています。リハビリ職（理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、歯科衛生士）が充実していますので、病院退院後の自宅復帰への**不安を軽減する受け皿**として、地域に貢献していきたいと考えています。

生田委員：冬場など困ったときに利用できるということですが、待機者もあるので簡単に入居できると思いませんが、実態はどうですか。

遠藤相談員：定期的に夏、冬場を利用される人がありますので、そういう人は優先しています。

鶴亀委員：定期利用の人が優先されるということは、すぐには利用できないということですね。

遠藤相談員：夏場・冬場の定期利用者やショートステイ利用者もが定期的に4名程度いらっしゃいますので、調整は大変です。

朝原主任看護師：老健は、病院と在宅の中間施設として、在宅復帰に向けての重要な施設ですが、利用者一人ひとりが複数の疾病を抱えた状態があり、**その人らしく日々過ごしていただくことも大事だ**と思っています。医師や看護師、リハビリ職、介護職が日々連携し、入居者の皆さんのケアに努めています。看取りについては、年間 15～16 名程度を施設内で対応していますが、ご本人やご家族の思いを汲み取ることに心掛けています。若手職員や外国人職員には、人生経験を積んだ入居者の皆さんに対し、**尊厳を持ったケア意識**を持つよう話しています。

高柴委員：看取り時の対応は、難しいことが多いかと想像します。家族が遠方にいる場合や身寄りのないケースなど大変だと思います。

朝原主任：ご家族との連絡を密にすることが大事だと思っています。幸いにも困難事例は発生していません。



■施設内外の点検・提言

中村総合：本日は、日本野鳥の会が来訪され、対応していました。なんぶ幸朋苑内には 100 以上のツバメの巣があるということで、表彰の申し出がありました。軒がしっかりあり、田んぼに囲まれた環境が鳥にとって良好であることが評価されたようです。鳥にとって良い環境は人間にとっても良い環境であると捉えています。今年は、なんぶ幸朋苑が 30 周年を迎えることから、**9月19日（土）に記念行事を予定**しています。職員全員で 30 周年記念のポロシャツを制作し、準備を進めています。また、なんぶ老健への紹介が増加し、稼働率が高い状態が続いています。現在は超強化型を維持しており、理想的な運営形態となっていますので、この状態を継続していきたいと考えています。

③



宇田川課長：水防訓練の実施状況について、映像を用いて報告。

①グループホームからの避難では、徒歩での移動を実施。グループホームへの道路は片側に歩道がなく、水路があるため、雨天時の避難は危険が伴うことが確認された。②デイサービスいいいからも避難訓練を実施。③特養からは、利用者をベッドごとエレベーターで2階へ搬送する訓練を実施。エレベーターにはベッドがギリギリ入る。訓練を重ねることで、スマホをトランシーバー代わりに使用し、1階から何名上がるかを連絡するなど、効率的な避難方法を確認した。全体の所要時間は約1時間で完了できるようになった。職員はヘルメットとビブスを着用し、各チームの避難完了を明確にしている。

高柴委員：エレベーターが使えなくなった場合は、どう対応されますか。

宇田川課長：早めの避難により、電気が使える状態で避難することを想定しています、最悪の場合は、1階から2階へは外部スロープの使用を予定しています。

岸本委員：停電の場合の対策は、考えていますか。

宇田川課長：自家発電を備えています、十分だとは思っていません。

岸本委員：入居者の方とお話をしました。月曜日には自宅に帰れると喜んでおられました。

鶴亀委員：帰れない人は、自宅がどうなっているのか心配されていましたが、周りの人が大丈夫だと励ます姿もありました。

宇田川課長：ご利用者同士で会話されることで、精神的に落ち着くことが多いです。

生田委員：初めて老健を訪問しましたが、広場のような空間でとても落ち着いた雰囲気を感じました。

高柴委員：施設内の環境も良く、多職種のスタッフが揃っていますので、安心して過ごせていることが分かりました。

荒井監事：次回は、7月23日（木）10：30～ キッズタウンさくら です。

④

